

縄文時代の漆文化と その起源に関する諸問題

学史的視点から今日的課題へ

Questions Concerning Lacquer Culture in the Jomon Period and its Origin :
From Historical Perspectives to Contemporary Challenges

工藤雄一郎

KUDO Yuichiro

①はじめに

②縄文時代の漆の起源をめぐる研究史

③河姆渡文化期の漆器および垣ノ島B遺跡の漆製品に関する年代学的検討

④ウルシと漆文化の起源について

【論文要旨】

本論文では、縄文時代の漆文化の起源をめぐる研究史について、1926年から2010年代まで歴史を整理した。縄文時代の編年的な位置づけが定まらない1930年代には、是川遺跡に代表される縄文時代晩期の東北地方の漆文化は、平泉文化の影響を受けて成立したものであるという考えがあった。1940年代に唐古遺跡で弥生時代の漆文化の存在が確認されて以降、中国の漢文化の影響を受けた弥生文化から伝わったという意見もあった。1960年代以降、照葉樹林文化論の提唱を受け、縄文時代の漆文化は大陸から各種の栽培植物とともに伝わったという見方も広がった。1980年代には、中国新石器文化と縄文文化との共通の起源を想定する共通起源説も登場した。これらはいずれも縄文時代の漆文化を列島外から来たとする伝播論である。一方、加茂遺跡の縄文時代前期の漆器の出土を考慮して、1960年代には縄文時代の漆文化自生説も登場する。その後、1990年代には縄文文化の独自性や縄文時代の漆文化の成熟度を重視する研究者から、自生説が主張されるようになる。2000年の垣ノ島B遺跡の発見、2007年の鳥浜貝塚の最古のウルシ材の存在の確認によって、縄文時代の漆文化自生説は力を増した。しかし、垣ノ島B遺跡の年代は信頼性が担保されていないこと、また垣ノ島B遺跡の事例を除外すると、中国の河姆渡文化の漆製品は日本列島の縄文時代早期末の漆器と同等かそれ以上の古さを持っていることを年代学的に検証し、改めて縄文時代の漆文化の起源が大陸からの伝来であった可能性を考慮する必要性があることを論じた。

【キーワード】 縄文時代、漆文化の起源、ウルシ、放射性炭素年代測定、河姆渡文化

①……………はじめに

縄文時代の漆文化の起源をめぐっては近年様々な仮説が提示されており、遺跡出土のウルシと漆の研究のなかでも最も活発に議論が行われているトピックの一つである。1970年代から1980年代にかけては、鳥浜貝塚などの低湿地遺跡の調査の進展や放射性炭素年代測定の導入によって、その起源の年代が5000年前を遡ることが確かめられた。この頃は照葉樹林文化論が活発に議論された時期でもあり、漆文化は中国の新石器文化に由来するという考え方が強かった。その後、2000年代になって、北海道垣ノ島B遺跡の漆製品の発見があり、これが9000年前とも推定され、漆文化の日本列島起源説も登場した。そして、2012年の鳥浜貝塚の縄文時代草創期のウルシ材の再発見とその年代測定の成果によって、植物としてのウルシ (*Toxicodendron vernicifluum*) そのものの由来の問題が加わり、ウルシと漆文化の起源論は非常に複雑になってきている。本研究では、縄文時代の漆文化の起源を巡る学史を整理して問題点を抽出した上で、その起源の仮説について検討したい。

なお、本論文では、植物としてのウルシについて記述する際には「ウルシ」、樹液やそれを利用する文化について記述する際には「漆」と区分しているが、引用中の文章では、各著者の記述に従った。

②……………縄文時代の漆の起源をめぐる研究史

縄文時代の漆文化およびその起源の研究史については、鈴木公雄 [1984, 1988] や、四柳嘉章 [2006, 2009], 岡村道雄 [2007, 2010], 阿部芳郎 [2004, 2012], 森川昌和 [2002] など多くの研究者によって議論されている。これらの記述と重複する部分もあるが、2000年以降現在までの動向を整理したものはないことから、ここで改めて縄文時代の漆文化の起源についての研究史を整理しておきたい。

1) 戦前の動向

縄文時代の漆器の存在が認識されたのは、1926(大正15)年のことである。1926年の埼玉県真福寺貝塚の調査については、阿部芳郎 [2004] に詳しく紹介されている。それによると真福寺貝塚において、地主の原田静作氏の収集品の中に、台地下の低地の泥炭層中から出土した「漆器風の有機質の特異なる遺物」があることがわかり [甲野, 1928], 甲野勇を介して大山柏と杉山寿栄男に伝えられた。この資料が本当に石器時代のものであるのかを確かめるため、大山柏が真福寺貝塚の低湿地において1926(大正15)年11月に発掘調査を行った。これは、有機質遺物を目的とした日本で初めての低湿地遺跡の調査でもあり、この調査で漆器やかごなどの繊維製品が縄文土器を伴って発見された。甲野勇が残した図版目次のメモによれば、「不明漆器」、「朱漆組籃」の記載があり、原田氏発見品の項目のなかにも「漆器」がある。「朱漆組籃」は籃胎漆器で、浅鉢形のもの、高杯の台とされたものの2点がある。この学史的に重要な発見であったこれらの漆器は、『真福寺泥炭層遺跡調査報告』が未刊行のまま、第二次大戦中の戦火で大山史前研究所とともに消失した。

このわずか2年後の1928(昭和3)年には、青森県八戸市是川遺跡の発掘が、地主の泉山岩次郎・斐次郎兄弟によって行われ、泥炭層から大量の土器や石器とともに、トチノキやオニグルミ等の植

物遺体、木製品などとともに多数の漆製品が出土した。1932（昭和7）年に刊行された『日本石器時代植物遺物図録』〔喜田・杉山, 1932〕には、是川遺跡から出土した漆製品が原色図版で掲載された。これらの漆製品も含め、是川遺跡の出土遺物の技術の高さ、工芸的進歩の著しさについては驚嘆の目が向けられたのである〔喜田, 1929, 1934〕。

また、杉山寿栄男が1928（昭和3）年に刊行した『日本原始工芸概説』では、「泥炭遺物に施されたる塗物の試験」という節で、塗膜片の化学的な試験を行い、それが漆であるとする見解を紹介している。阿部芳郎〔2012〕によれば、これが具体的な石器時代遺物を対象とした漆の化学分析の嚆矢であるという。

さて、これらの発見によって、1930年代には縄文時代の漆文化の存在は明らかになっていたが、この重要性については十分に理解されていなかった。その要因として小林行雄〔1962〕は、当時はまだ「漆状塗布物」として漆である確証がまだ得られていなかったこと、縄文式土器の編年観も公認されておらず、縄文式土器の一部は平安・鎌倉期まで継続して使用されていたというような説が勢力を持っていた時期であったことを指摘している。例えば、喜田貞吉〔1934〕は、青森県下の縄文文化末期の絶対年代は畿内、関東などと比較して遅れて開花した文化であり、平安時代末あるいは鎌倉時代頃まで年代が下降するものではないかと考え、また木製品は金属製刃物でなければ到底製作しえないと推論した。もし喜田が考えるように平安期のものとするならば、日本の古代における漆文化は、正倉院宝物にみられる伝世品の漆製品の数々や、平泉文化の豪華絢爛な仏教美術に代表されるように周知のものである。小林行雄が言及したように、是川遺跡の漆器の発見は、漆文化の歴史の上になんらかの新知見を加えるような意義を見いだすことができないことになる〔小林1962〕。

喜田の年代観は、1936年に山内清男とのいわゆる「ミネルヴァ論争」へと発展するが、科学的な縄文土器型式研究によって全国的な縄文土器の編年体系を構築した山内清男によって喜田の年代観は完全に否定されたことは著名である。ミネルヴァ論争は土器型式および編年論においてたびたび議論されるが、この背景にあった是川遺跡の漆文化の存在について言及されることはほとんどない。しかしながら、この事実は、古代史学者の年代観を大きく見誤らせるほどに、是川遺跡の漆工芸の技術的水準や完成度が高かったことを意味するものでもあることは小杉康が指摘するところである〔小杉, 2003〕。なお、亀ヶ岡文化をめぐる喜田のような年代観は一部の研究者の間では戦後も引き継がれており、1972年に刊行された『是川遺跡出土遺物報告書』で、清水潤三〔1972〕や保坂三郎〔1972〕がそうした立場を表明していることは付記しておきたい。

一方、明治時代末～大正時代には、朝鮮半島において楽浪漆器の発見があったことも注意しなくてはならない。明治時代末から大正時代にかけて行われた朝鮮半島北部の楽浪郡（紀元前108年～後303年）の古墳群における発掘調査（特に1916（大正5）年や1924（大正13）年の調査）によって、保存の良い多数の漆器が出土し、これらは後に楽浪漆器と呼ばれるようになった。文献上から中国の周代（紀元前11世紀～）には漆工がかなり発達していたと推測されていたが、楽浪郡の発掘以前には具体的な遺跡出土資料がなかったのである〔六角, 1932〕。この楽浪郡の調査によって、前漢の統治下の高級官僚の墓には多数の漆器が副葬されていたことが明らかとなり、漆器には夾紵や彩漆による描画、繊細な線刻模様など、優れた技術があることが判明した。また、紀年銘や監督者が

明記されているものもあり、蜀郡の官営工房で製作された漆器が楽浪郡まで運ばれたことが分かった。なお、夾紵(乾漆)の技法や多彩な彩漆の技法などは日本では7世紀までは見られず、漢の高度な漆工技法そのものが楽浪郡を経由して日本に直接的に伝わっていないことは、現在の視点から見れば明らかである。しかし、前漢の首都から遠く離れた朝鮮半島の楽浪郡まで漆器が普及していたことは、当時の研究者にとってみれば、漆器もしくはその技法が朝鮮半島を経由して日本列島にも伝来した可能性があることを意識させるものでもあった。例えば六角紫水[1932]は、漆器の実物資料が発見されていないものの、楽浪郡と新羅・百濟・高句麗などとの関係を考慮しつつ、漆器が日本列島にも渡来していた可能性を考えた。

一方、1930年代には山内清男によって、弥生文化と稲作技術の関係が明確に指摘され[山内, 1932a～d]、これを受けて森本六爾が弥生文化を「原始的農業社会に生まれた文化」とする評価した[森本, 1933]ことも漆文化を考える上で重要である。弥生文化を水田稲作主体の農耕文化とする理解は、弥生文化を律令国家や記紀神話の礎となった大陸伝来の文化と位置づける見方[小林, 1938]と結びつき、日本列島における漆文化を中国の漢の漆文化の渡来とみる考えは、それらとも整合的だった。

なお、1937(昭和12)年に発掘調査が行われた奈良県唐古遺跡から、弥生時代前期と推定される漆器が出土した。これは、弥生時代遺跡における漆器の初めての出土例であり、発掘調査報告書には「唐古弥生式文化(第一様式土器期)に漆器の既に存した事実を立証し得るのは特筆すべきである」と記載されている[末永ほか1943]。唐古遺跡の調査成果によって、弥生時代にも漆文化が存在したことがようやく明らかになったのである。この結果、「弥生時代の漆文化は中国の秦漢文化から伝来したものであり、是川遺跡や真福寺貝塚にみる縄文時代晩期の高度な漆製品は、弥生文化より教わったもの」という考え[小林1947]が登場するようになったものと思われる。

2) 戦後・1950年代～1960年代

1948年に千葉県の加茂遺跡の発掘調査が慶應義塾大学によって行われ、低湿地から多数の木製品や土器とともに、縄文時代前期に遡る漆塗り土器片が発見された[三田史学会, 1952]。これは従来の常識を打ち破る、極めて重要な発見であった。この漆器について江坂輝弥[1952]は、「漆の技術が漢代文化の影響を受けた楽浪方面より我国に伝来されたものと考え、縄文式文化末の青森県三戸郡是川泥炭層遺跡出土の丹漆塗植物性遺物、土器等の技術は大陸伝来の弥生式文化より伝えられたものであろうと考えた従来の学説はここにおいて脆くもくつがえされたところであり、我が日本新石器時代の縄文式文化の總ゆる技術に対し、その伝来系統について再検討的研究の必要性を痛感せるものである」と主張した。ここで言及されている「従来の学説」は弥生式文化が起源となっており、喜田貞吉[1934]の平泉文化の影響説よりも古く位置づけられている。この学説とは、小林行雄[1951]のことを示しているものと思われる。小林[1951]は是川遺跡などの縄文時代晩期の漆製品に言及し、「実物こそ現在では残っていないが、晩期以前に相当永い伝統の存したことを想定すべきであろう」と記す一方で、「しかし、これらの素地に漆を塗るという知識までも、縄文式文化自身のうちで自然に発見されたものとするには、多少の疑問があるのである。この場合、漆に関する技術が新しい弥生式文化によって大陸からわが国に導入され、それが東日本の縄文式文

化にも伝えられたと説明することは、それ自身極めて明快であるが、そういうためには、弥生式時代の遺物で漆を用いたものの発見された数と質とが、今日ではあまりに貧弱である」とも記していた。縄文時代晩期の東北が時期的に弥生時代と同時期か遅いと考えていたことがわかる。

また、江坂輝弥 [1952] は、「縄文文化前期に於いて、既に漆に類する塗料の用いられていたことを明らかにした。若しこれが漆であるとすれば、その技術が自生か伝来か、伝来したものならばその経路如何、ひいては縄文文化と外国諸文化との関係に及ぶ重大な発見である」と指摘しており、1952年の段階で、漆文化の「自生か伝来」という問題が提起されている点は注意しておく必要がある。

この「自生か伝来か」という問題に対して木内武男 [1962] は、加茂遺跡の出土例に触れつつ「わが国における漆使用の起源は、漆の産地との関連から考えてむしろ独立発生的なものともみるのが穏当だろう」という考えを示した。しかしながら、1971年には「自然発生的な事象ともみられ、また日本海航路による大陸文化の直接の影響とも考えられよう」[木内 1971]として曖昧な記載をしており、具体的な出土資料の不足から議論は進展していなかった様子が見える。

1960年代当時、加茂遺跡を除けば縄文時代前期どころか、縄文時代中期・後期の漆器は未発見であり、加茂遺跡と比較しうる資料が皆無であった。このことから、小林行雄 [1962] が「両者の間に三千年の時間のへだたりが介在することを考えると、その間に漆の技術が縄文式文化のなかで保持されたという事実を立証する資料が、ほとんどあたえられていない現在の段階では、両者をいちおう切り離して考えることのほうが妥当だろう」と述べているように、加茂遺跡の存在は正当な評価を得るに至らず、その位置づけについては持ち越しとなってしまった。

その後、1960(昭和35)年には北海道御殿山遺跡での縄文時代後期末の漆塗櫛の発見があり、1963年には縄文時代後期の加曾利B式期(工藤・永嶋 [2021]では縄文時代晩期に相当する¹⁴C年代が得られている)と推定された千葉県高谷川遺跡の櫛の発見があった[清水 1963]。しかし、縄文時代前期・中期の新たな資料の出土なく、縄文時代後期の資料もごくわずかであった。このギャップを埋める漆製品の出土は、1970年代から80年代にかけての大規模開発による低湿地遺跡の発掘調査事例の増加を待たねばならなかったのである。

3) 1970年代

1970年代になると、大陸からの外来文化の影響を考える様々な学説が登場してくる。例えば、江坂輝弥 [1973] は縄文時代前期の玦状耳飾や滑車状耳飾、カジノキなどが大陸由来である可能性を考慮しつつ、「滑車状耳栓・漆・ヒョウタン・カジなどはほぼ同時にわが国に渡来したものであろうか」と、漆文化が様々な外来植物や外来文化とともに伝播した可能性を考えた。

また、1970年代の漆文化の起源の探究において最も重要な出来事は、1975年の第4次調査で大規模な発掘が行われた福井県鳥浜貝塚である。鳥浜貝塚の調査によって、縄文時代前期の漆塗りの櫛や漆彩文土器、赤色漆と黒色漆で塗り分けられた漆塗り木器など、多数の漆製品が、縄文時代前期の土器と共に発見された[鳥浜貝塚研究グループ, 1979]。この発見によって漆文化が縄文時代前期に遡ることが確実となり、1948年の加茂遺跡の縄文時代前期の漆器の存在が誤りではないことが確かめられるとともに、縄文時代の漆文化の起源を考えるうえでも重要な画期となった。なお、

森川昌和 [1995] によると、鳥浜貝塚の漆製品は個体数で木製品 89 点、漆塗り土器 125 点、漆塗り糸 2 本であり、漆と認識できていない可能性があるものを含めるとその数は 300 点近くになる可能性があり、縄文時代前期としては極めて多数の漆製品が出土した。

漆文化の起源に関係する 1960 年代から 70 年代にかけての注目すべき動向として、いわゆる照葉樹林文化論がある。中尾佐助 [1966, 1967] が提唱した照葉樹林文化は、中国西南部を中心として日本まで広がる照葉樹林帯に、根菜や穀類を生産する焼畑や、根茎類などの水晒し技術が展開していることから想定された、地理学的な農耕文化論である。中尾佐助はこの照葉樹林文化に共通してみられる要素として、茶と絹、ウルシ、柑橘、酒、シソを挙げ、その文化の中心地域となる中国西南部から日本への、照葉樹林文化の伝来を想定した。また、照葉樹林文化論を牽引してきた佐々木高明 [1982] は、漆器を「照葉樹林帯を特徴づける器」と位置づけた。照葉樹林文化論は栽培植物の系統性に基づく文化史の枠組みを意識した概念でもあり、中尾 [1966] による照葉樹林文化の 5 つの段階の提唱以後、①プレ農耕段階、②雑穀を主とした焼畑段階、③稲作ドミナントの段階、という 3 つの発展段階区分として整備された [上山ほか 1976; 佐々木 1982 など]。

こうした照葉樹林文化論の動向とも関係して、前述の鳥浜貝塚で出土したヒョウタンとリョクトウ (その後の研究でリョクトウは否定され、2000 年代に入ってアズキ亜属であることが判明する) は、栽培植物として注目され、1977 年に季刊ドルメンの第 13 号での特集「縄文の採集・栽培植物」ではその意義について度々触れられている。西田正規 [1977] はヒョウタンとリョクトウは日本に野生種がなく、何らかの形で日本列島へ運び込まれたと考えなくてはならないと指摘し、球状耳飾の存在なども考慮して、「温暖化とともに南からの影響が日本に及んだ時、これらの栽培植物がともに持ち込まれた」と理解した。この時期、縄文時代前期における外来植物の伝来は、照葉樹林文化の伝播論とも融合し、ほぼ既定路線として認識されていったと見てよいだろう。なお、花粉分析から日本列島の植生変遷を論じた安田喜憲 [1977] は、縄文時代前期に西日本を中心として照葉樹林が成立することから、照葉樹林文化と呼ぶにふさわしい文化は、縄文時代前期以降の文化であり、当初から縄文文化に根ざした文化ではなく、「外来の付加的要素の強い文化」と位置づけた。

鳥浜貝塚における目覚ましい考古学的成果を受けて、縄文時代前期における外来の栽培植物の存在に関する論調は、これらの存在を確定的と見なす方向に舵を切ったことを受け、照葉樹林文化論の枠組みでは、鳥浜貝塚におけるこれらの栽培植物の存在が、「プレ農耕段階の原初的農耕」 [佐々木 1982] として認識されるようになっていった。

考古学者の立場からも、例えば江坂輝弥 [1977] は藍胎漆器の技術に触れるなかで、「前期初頭にヒョウタン、アズマビシ、緑豆などとともに本漆が長江南部方面から渡来した時点で、将来された技術であるか、本漆がわが国へ流入後中期から晩期への時代に、わが国内で、全く独自発生した技術であるのか、今後の調査でゆっくりと見極めたい」と記載していることから、藍胎漆器の技法の発達は別として、漆文化とウルシそのものは外来であったと見ていたことが分かる。江坂輝弥は河姆渡文化や照葉樹林文化論を念頭において、ウルシと漆文化の両者が渡来したと考えていたようである。

このような考えは広く浸透したと見られ、後に鈴木公雄 [1984] も縄文時代前期におけるヒョウタンの存在から、「漆技術の渡来も同時にあったと考えることも不思議ではない」と述べている。

一方、この時期には、1973～1978 年にかけて、中国浙江省の河姆渡遺跡の発掘調査が行われ、

新石器時代の河姆渡文化期の文化層から漆器が発見されたことは、日本でも大きく注目されていたことも関係しているのだろう。ウルシの本来の起源地と推定された中国でも、縄文時代前期に匹敵する古さの漆器がようやく発見され、中国の新石器時代に漆文化が存在する以上、縄文時代前期もしくはそれ以前における漆文化の日本列島への渡來說には、矛盾が生じなくなったためである。

4) 1980年代～1990年代

1979～1981年にかけて行われた埼玉県寿能泥炭層遺跡において、縄文時代中期から後晩期の多数の漆器が出土した。寿能泥炭層遺跡の調査では自然科学との協業による学際的・総合的な研究が行われたことも注目に値するが、縄文時代の漆文化史の研究においては、縄文時代中期の漆文化の存在を確認できたことが重要である。寿能泥炭層遺跡での中期の漆器の発見により、「前期以降の木工・漆工芸の技術的・様式的変遷は極めて円滑にたどることが可能となった」と鈴木公雄[1984]は評価した。

一方、中国考古学の立場からの発言も注意しておきたい。漆文化の起源をめぐる安志敏[1985]は、日本の漆技術の起源が、長江下流域の新石器文化の強い影響を受けたと結論づけるとともに、玦状耳飾が漆とともに導入されたと主張した。安は、漆と玦状耳飾、縄文文化の栽培植物の伝播ルートとして、江蘇・浙江から直接九州に至る「東中国海ルート」を想定した。

なお、1985～1988年にかけて行われた山形県押出遺跡の発掘調査において、縄文時代前期の多数の漆製品、漆彩文土器などが出土した[山形県教育委員会、1990]。鳥浜貝塚で確認された高度な漆文化の広がりや押出遺跡でも確かめられたことも、大きな影響を与えたものと思われる。押出遺跡では漆液容器も出土したことから、樹液採取から漆器製作までの作業がこの遺跡で行われていたことも重要だろう。

これらの成果を受けて鈴木公雄[1988]は、「縄文時代前期の漆工芸がすでに一定の技術体系を備えるまでに発達した水準にあった」ことを重視し、「漆工芸の起源はこれよりもさらに古くさかのぼる」と考えた。また、縄文時代前期の漆文化が河姆渡文化のそれよりも高度である点を重視し、河姆渡文化からの直接的な伝播説を否定した。そこで鈴木は、「6千年前以前の東アジアの先史世界において、縄文文化と河姆渡文化の漆技術の共通の起源となるような文化が存在し、そこから漆技術が日本と中国にわかれて、それぞれ独立して発達した」と想定した。中国と日本の漆文化の「共通起源説」がここに登場したのである。

また、1980年代から1990年代にかけて、縄文時代前期に相当する漆器の出土例は飛躍的に増えてきた。例えば日本列島の最北端の漆器である北海道標津町の伊茶仁チシネ遺跡や、北海道函館市のハマナス野遺跡、北海道木古内町の新道4遺跡など、北海道における初源期の漆製品が発見されている。東北では青森県青森市の三内丸山遺跡や、秋田県池内遺跡、北陸では漆塗りヒョウタンが出土した富山県南太閤山I遺跡や紐状漆製品が出土した新潟県大武遺跡、漆塗り櫛が出土した三引遺跡などの調査が行われている。1998年には、最西端の漆器であり現時点で最古の漆工用具である漆液容器が出土した鳥根県夫手遺跡の調査も実施されている。神奈川県羽根尾貝塚の発掘調査が行われ、縄文時代前期の本胎漆器や漆塗り櫛が出土したのもこの時期である。

5) 2000年代

2000年代になると、漆文化の起源をめぐる様々な学説が登場するようになる。それらに最も大きな影響を与えたのが、2000年に発掘調査され、縄文時代早期の土壙墓から出土した、北海道の垣ノ島B遺跡の漆製品である〔南茅部町埋蔵文化財調査団、2002〕。被葬者が漆製品を身にまっていた状況が明確に分かる出土状態もさることながら、¹⁴C年代測定およびその暦年較正によって、「今から約9000年前」と提示された点は大きな衝撃を与えた。垣ノ島B遺跡の発掘調査報告書で永嶋正春〔2002〕はこの漆製品が最も古い可能性がある資料であることから、「十分すぎるほど慎重に検討されるべき」ことを注意した。また、非破壊分析を原則としたため回収された土壤に含まれた極微細な破片について永嶋が分析をしているが、「良質な塗膜状を呈する部分も多く認められることから、漆を使用した蓋然性が高いものと考えている」と、漆である可能性を示唆した。ただし永嶋は、「極端に古い資料である」ため、微細な碎片を集めて今後の理化学的な分析をする必要性を述べている。

その後、永嶋正春〔2006〕は、「火災消失後における赤外線分光分析の結果では、漆の蓋然性が高いものと判断されている。しかしながら、消失以前の、理化学的分析未実施の状況であっても、発掘時における本資料の全体的性状、すなわち9000年を経過してもなお当初の形態的特徴を維持し続けていること、発色の良好なベンガラ顔料が関係していること、塗膜状性質を要所に残していることなどを積極的に説明できる素材は、唯一漆のみ」と述べており、これが漆であったと考えている。

垣ノ島B遺跡での発見を受けて、漆文化の起源に関するさまざまな説が提唱された。鳥浜貝塚の発掘調査の担当者でもあった森川昌和〔2002〕は、垣ノ島B遺跡に注目しつつ、日本列島の古い漆器出土遺跡のほとんどが北日本、特に北海道、東北地方にあり、日本海側に出土することを重視して、縄文時代の漆文化が、大陸の北方ルートで日本海を經由して伝播したという仮説を提示した。アサヤゴボウ、珧状耳飾なども北方から日本海を經由して伝来したと考え、大陸から日本列島へと「漆のきた道」が存在したことを想定したのである。ただし、「北回り」の具体的なルートなどに言及しておらず、詳細は不明である。

小杉康〔2003〕はウルシが「植物学的には中国の南方を原産地とする外来植物である」ことから、日本列島のウルシについて「本来在来種があった」という説があることや「ヤマウルシなどの他の種類」のウルシの仲間から採取された可能性を考慮しつつ、「鳥浜貝塚で発見された早期あるいは草創期にまで遡る、やはり外来種であるヒョウタンなどの存在を考え合わせると、かなり早い段階で大陸側との交渉を考慮した方がよいであろう」と述べている。

四柳嘉章〔2006〕は、9000年前とされる垣ノ島B遺跡の資料について、2004年に実施された塗膜の赤外線分光分析の結果〔奈良文化財研究所ほか、2004；阿部、2006〕では保存処理に用いたアクリル樹脂と漆、赤色顔料のスペクトルが重なっていることから、「漆と確定するにはまだ時間がかかりそうだ」として慎重な姿勢を示している。一方、垣ノ島B遺跡を除いた縄文時代早期末以降については、日本海側沿いに初期の漆器出土遺跡の分布が顕著であることから、これを「漆海道」と呼んだ。河姆渡遺跡の第四文化層の木胎漆器の塗膜の赤外線分光分析で、これが漆と同定された中国最古の資料であることを注意し、また「初期の漆器出土遺跡が日本海側に多く、河姆渡遺跡に

みられる江南型（長江下流域）玦状耳飾（C字型耳飾）の出土も、日本列島への技術伝播を考える上で重要なヒントになる」と記しており、中国から日本列島への技術伝播の可能性を示唆した。

これに対し岡村道雄 [2007] は、垣ノ島 B 遺跡の年代として 9000 年前を採用しつつ、垣ノ島 B 遺跡以後の資料との間に 2000 年の開きがあり、「発展・完成した製品が突如出現する」という不自然さを指摘しつつも、中国の同時期の漆文化との技術的な差異や、韓国、九州などで縄文時代早期から前期にかけての漆製品が出土していないことから、「南から漆文化が伝播したという説に否定的である」と述べた。また、後述する鈴木三男らによる現生ウルシの DNA 分析結果 [鈴木, 2007] を参照し、「中国北方と同緯度地域に位置する日本列島に共通して更新世から生育していたウルシを、完新世になって定住し始めた日本列島北部の縄文人が、初めて漆液を掻き取って塗料とした可能性が出てきた」、「漆文化こそ日本独自の文化であった可能性が出てきた」と主張し、新たな漆文化起源論を展開した。

6) 2000 年代における植物学の進展と考古学への波及

漆文化の起源に関わる研究で、2000 年代の最大の進展と言えるのは、植物学の分野で遺跡出土のウルシ（木材・花粉・種実）の同定が可能となってきたことである。青森県岩渡小谷 (4) 遺跡出土の縄文時代前期のウルシ材を同定していた能城修一と鈴木三男は、ウルシ属の木材組織の導管径に着目し、年輪内での径の形成パターンに違いがあることを見出し、ウルシと他のウルシ属の樹種を識別することが可能であることを示した [Noshiro and Suzuki, 2004]。この識別点に基づき、これまで「ウルシ属」もしくは「ヤマウルシ」と同定していた遺跡出土木材のプレパラートを全て見直した結果、漆器が出土する多数の遺跡でウルシ材が存在していたことを明らかにした。こうした成果を受けて、能城修一と佐々木由香は、縄文時代前期以降、ウルシが集落周辺で普通に植栽され、資源管理の対象となっていたと主張した [Noshiro et al., 2007; 能城・佐々木, 2014]。また、能城修一ら [Noshiro et al., 2007] が同定したウルシ材のうち、特に注目されたのが、鳥浜貝塚の 1 点の木材である。この木材は縄文時代草創期の層準から出土したことが記録されており、「日本最古のウルシの証拠」として一躍注目されることとなった。しかし、1985 年出土資料の小さな材であり、この木材の他に類例が無いこと、福井県立若狭歴史博物館に保管されていた鳥浜貝塚の膨大な数の出土資料から、この 1 点のウルシ材をすぐに発見するのは困難であったことなども関係し、このウルシ材が縄文時代前期の遺物包含層の出土資料との取り違えによって、縄文時代草創期として記録されてしまった可能性なども完全には否定できず、その位置づけは保留となってしまった。

一方、花粉分析では、吉川昌伸が、花粉表面の彫紋模様によってウルシを識別することを可能とし、縄文時代前期の青森県向田 (18) 遺跡、三内丸山遺跡、大矢沢野田遺跡などでウルシ花粉が検出されたことを明らかにした [吉川, 2006]。また、ウルシ果実についても吉川純子と伊藤由美子が現生と遺跡出土資料を用いて検討を行い、ウルシの識別点を研究し [吉川・伊藤 2004, 2006; 伊藤, 2006]、内果皮外層を構成する細胞の形態により他のウルシ属やヌルデ属からウルシが識別できる可能性を示した。ただし、その後の吉川純子の研究により、果実の成長段階による細胞形態の変化や病害虫による形質への影響、地域差などを考慮すると、確実な識別には至っていない点が指摘されている点は注意しておきたい [吉川, 2014]。

さらに、中国・朝鮮半島・日本に生育するウルシの葉緑体 DNA 分析では、黄河～揚子江中流域に主に分布する湖北型、浙江省に分布する浙江型、日本・韓国・遼寧省に分布する日本型の3種類のハプロタイプに区分できることが明らかとなった〔鈴木、2007〕。湖北型と日本型には5箇所の塩基置換があり、日本のウルシは湖北省のウルシとは全く結びつかないことが明確になった。なお、後に山東省の資料が追加され、山東省には浙江型と日本型があることがわかっている〔鈴木ほか、2014〕。

これらの成果に基づいて、岡村道雄〔2010〕は垣ノ島 B 遺跡を世界最古の漆製品と理解し、漆文化の日本列島起源説を唱えた。その根拠として岡村は、日本列島の現生のウルシの DNA が、韓国や中国東北部のウルシと同じ型であることを重視し、大陸と日本列島が過去に度々陸続きになったことを根拠に、日本列島にもごく少数ながら旧石器時代以前からウルシが自然分布していた可能性を考えた。そして、旧石器時代に接着剤などとして利用されたウルシが、縄文時代の遅くとも早期後葉以後に定住が成立して以後、日本列島北部に漆文化が定着し、管理・栽培されるようになり、各種漆製品に利用されるとともに、漆文化が分布を広げたと解釈した。特に、垣ノ島 B 遺跡の年代を最古と見なして大陸よりも日本列島の漆文化が古く、技術的にも種類的にも独自に発達したと考へ、日本列島の東北部で漆文化が生まれた可能性を考えた。特に漆を塗った繊維製品の使用が北海道で縄文時代早期半ばの9000年前に始まったと推定した。

7) 2010年以降の動向

能城修一と鈴木三男らの研究によってその存在が明らかとなった鳥浜貝塚のウルシ材が、2011年に若狭歴史博物館の収蔵庫のなかから発見された。このいきさつについては鯨本眞友美〔2016〕が詳しくまとめているので参照されたい。この資料の¹⁴C年代測定を筆者らが行い、能城修一らがウルシ材の樹種の再同定を行った。その結果、この資料は間違いなくウルシであること、またその年代は較正年代で約12600 cal BPであることが判明した〔鈴木ほか、2012〕。これは間違いなく縄文時代草創期の年代であり、層序による年代観が正しかったことが証明されただけでなく、その位置づけが最終氷期末まで遡ることが明確になった点で、極めて重要な成果となった。

一方、「学際的研究による漆文化史の新構築」の共同研究の一環として、石川県三引遺跡の漆塗り櫛について新たに¹⁴C年代測定を実施した。この資料は、縄文時代早期末～前期初頭とした遺物包含層から出土したものであり、垣ノ島 B 遺跡を除けば日本最古の漆製品であった。年代測定の結果、この漆塗り櫛の¹⁴C年代は 6290 ± 30 ¹⁴C BP、較正年代では7270～7165 cal BPであることが明らかとなった〔工藤・四柳、2015〕。これにより、三引遺跡の櫛は最古の漆塗り櫛であることも明らかとなった。

なお、鳥浜貝塚については、能城修一らによって、2012年から福井県立若狭歴史博物館に保管されていた堆積物試料の分析が新たに行われた。このうち、漆文化の起源に関わる大きな成果は、吉川昌伸による花粉分析である〔吉川ほか、2016〕。鳥浜貝塚では縄文時代草創期から前期までの各時期の堆積物試料について体系的な年代測定により時期を明確にしつつ〔工藤ほか、2016a〕、花粉分析を行ったことで、縄文時代草創期から縄文時代早期前葉の押型文土器の時期にかけて、ウルシ花粉が少量ながら連続的に検出された。また、縄文時代前期においてもわずかではあるが、ウルシ

花粉が検出された。これによって、鳥浜貝塚のウルシ材と同時期に、周辺にウルシの木が存在していた可能性が高いことが改めて確認できたのである。ただし、縄文時代草創期から早期の鳥浜貝塚は定住的な集落遺跡とは考えられず、二次林的な環境のなかで人為的にウルシが存在したとは考えにくい点は注意しておきたい [工藤ほか, 2016b]

以上のように、漆文化の起源を巡って、状況はかなり複雑化しつつある。そこで、以下では日本列島の漆文化の起源に関わるいくつかの問題について、「年代学」の視点から改めて議論してみたい。

③……………河姆渡文化期の漆器および垣ノ島 B 遺跡の漆製品に関する年代学的検討

1) 中国河姆渡文化期の漆器の位置づけの再検討

中国新石器時代の河姆渡遺跡から出土した漆器の年代については、これまで 7000 年前、あるいは 6500 年前などと記載されることが多かったが、その根拠となった ^{14}C 年代が具体的に示されている論文は把握していない。おそらくは河姆渡遺跡の発掘調査報告書が刊行される以前から公開されていた情報と、2003 年の発掘調査報告書刊行後は、それに記載された情報に基づいているのであろう。

河姆渡遺跡の発掘調査報告書 [浙江省文物考古研究所, 2003] では、包含層出土資料の年代測定がこれまで 27 点報告されている。このうち、通し番号の (11) (16) (18) (19) の 4 点が層序と一致しないとして除外され、報告書では各期の年代について、河姆渡一期：7000～6500 年前、二期：6300～6000 年前、三期：6000～5600 年前、四期：5600～5300 年前と区分された。

しかし、この年代は β 線計測法による未校正の ^{14}C 年代であり、また、 ^{14}C の半減期は 5730 年が使用されている。このため、近年の暦年校正年代とは比較ができないため、半減期 5568 年に変換した上で Conventional ^{14}C age に変換し、さらに最新の暦年校正曲線である IntCal 13 [Reimer et al., 2013] で校正したのが表 1 および図 1 である。

確率分布 2σ の最大範囲で考えると、第一期は 7980～7000 cal BP、第二期は 7430～6310 cal BP、第三期が 7000～5990 cal BP、第四期が 6280～5650 cal BP となる。これはあくまで確率が高い最大時間幅として考えた場合であり、実際にはもっと短期間であったはずであるが、1980 年代に測定されたと思われる β 線法の誤差が大きく、絞り込みは難しい。

なお、河姆渡遺跡は第一期には黒漆塗りの筒形木器があり、第二期には著名な赤色漆塗りの木胎漆器がある。上記の校正年代で対比すると、第一期は縄文時代早期後葉を中心とし、第二期は縄文時代早期末葉～前期前半に相当する。また、黒漆塗りの筒型木器は田螺山遺跡でも出土し、 5910 ± 30 ^{14}C BP (6795～6660 cal BP) の年代が得られており [西本ほか, 2010]、河姆渡遺跡の第二期・第三期の年代と近い。

一方、中国で最古とされている、跨湖橋遺跡の漆塗り木弓とされる資料は、直接的な年代測定例がないようだが、遺物包含層の時期は 6370 ± 230 ^{14}C BP～ 6120 ± 240 ^{14}C BP という年代が得られている。誤差が大きいですが、おおよそ 7500～7000 cal BP 頃の間と捉えることができるだろうか。ただ

表1 河姆渡遺跡の放射性炭素年代測定例一覧

通し番号	資料番号	調査区	文化層	¹⁴ C年代 (BP) (半減期 5730年)	¹⁴ C年代 (BP) (半減期 5568年)	Intcall3 較正年代 (cal BP, 2σ)	備考
(24)	ZK0587	T24	(1)	5330 ± 130	5180 ± 130	6280-5650	
(2)	BK75058	J1	(2)	5660 ± 125	5500 ± 120	6560-5990	
(17)	BK78118	T232	(2)	5840 ± 125	5680 ± 120	6750-6220	
(25)	ZK0588	J1	(2)	6015 ± 135	5850 ± 130	7000-6340	
(7)	BK78105	T212	(3)	6215 ± 125	6040 ± 120	7250-6630	
(8)	BK78106	T212	(3)	6295 ± 190	6120 ± 190	7430-6560	
(10)	BK78110	T213	(3)	5950 ± 115	5780 ± 110	6850-6310	
(11)	BK78111	T225	(3)	6705 ± 125	6520 ± 120	7620-7170	除外
(12)	BK78113	T232	(3)	6265 ± 190	6090 ± 190	7420-6540	
(18)	BK78119	T211	(3)	6850 ± 130	6660 ± 130	7790-7310	除外
(26)	ZK0589	T30	(3)	6010 ± 130	5840 ± 130	6980-6320	
(1)	BK75057	T16	(4)	6955 ± 130	6760 ± 130	7920-7420	
(3)	BK78101	T211	(4)	6715 ± 125	6530 ± 120	7660-7170	
(4)	BK78102	T211	(4)	6700 ± 125	6510 ± 120	7610-7170	
(5)	BK78103	T211	(4)	6570 ± 120	6390 ± 120	7560-7000	
(6)	BK78104	T211	(4)	6945 ± 190	6750 ± 190	7970-7290	
(9)	BK78109	T212	(4)	6905 ± 220	6710 ± 210	7980-7170	
(13)	BK78114	T232	(4)	6890 ± 130	6700 ± 130	7830-7320	
(14)	BK78115	T214	(4)	6600 ± 115	6420 ± 110	7570-7030	
(15)	BK78116	T214	(4)	6850 ± 120	6660 ± 120	7740-7310	
(16)	BK78117	T225	(4)	5905 ± 115	5740 ± 110	6780-6300	除外
(19)	PV0028	T16	(4)	5960 ± 125	5790 ± 120	6890-6310	除外
(20)	PV0047	T21	(4)	6905 ± 155	6710 ± 150	7920-7320	
(21)	WB77 ~ 01	T16	(4)	6630 ± 125	6450 ± 120	7590-7030	
(22)	ZK0263	T21	(4)	6720 ± 145	6530 ± 140	7670-7170	
(23)	ZK0263 ②	T	(4)	層含炭陶片 6740 ± 130	6550 ± 130	7680-7180	
(27)	ZK0590	T16	(4)	6850 ± 120	6660 ± 120	7740-7310	

し、同遺跡から出土した中国最古の丸木舟と呼ばれている資料は 7070 ± 155 ¹⁴C BP, 7055 ± 90 ¹⁴C BP, 6991 ± 50 ¹⁴C BP の3点が得られており、包含層の推定時期よりも古い [浙江省文物考古研究所・蕭山博物館, 2004]。これらの河姆渡文化期の資料については中村慎一らが総合的な調査を行っており [中村編, 2010], いずれより詳細な ¹⁴C 年代測定結果が公表されるものと思われるが、現状ではこれらのデータが河姆渡文化期の漆器の古さを考える上での主要なものとなるだろう。

以上のデータから、河姆渡文化期の漆器の古手の資料については、7500~7000 cal BP までは確実に遡るものと思われ、それ以前に位置づけられる可能性も考慮しておきたい。

2) 北海道垣ノ島 B 遺跡の漆製品の年代の再検討

次に、「日本列島最古の漆製品」として言及されることが多い北海道の垣ノ島 B 遺跡について整理しておきたい。垣ノ島 B 遺跡の漆製品の年代については、「約 9000 年前」という結果のみが一

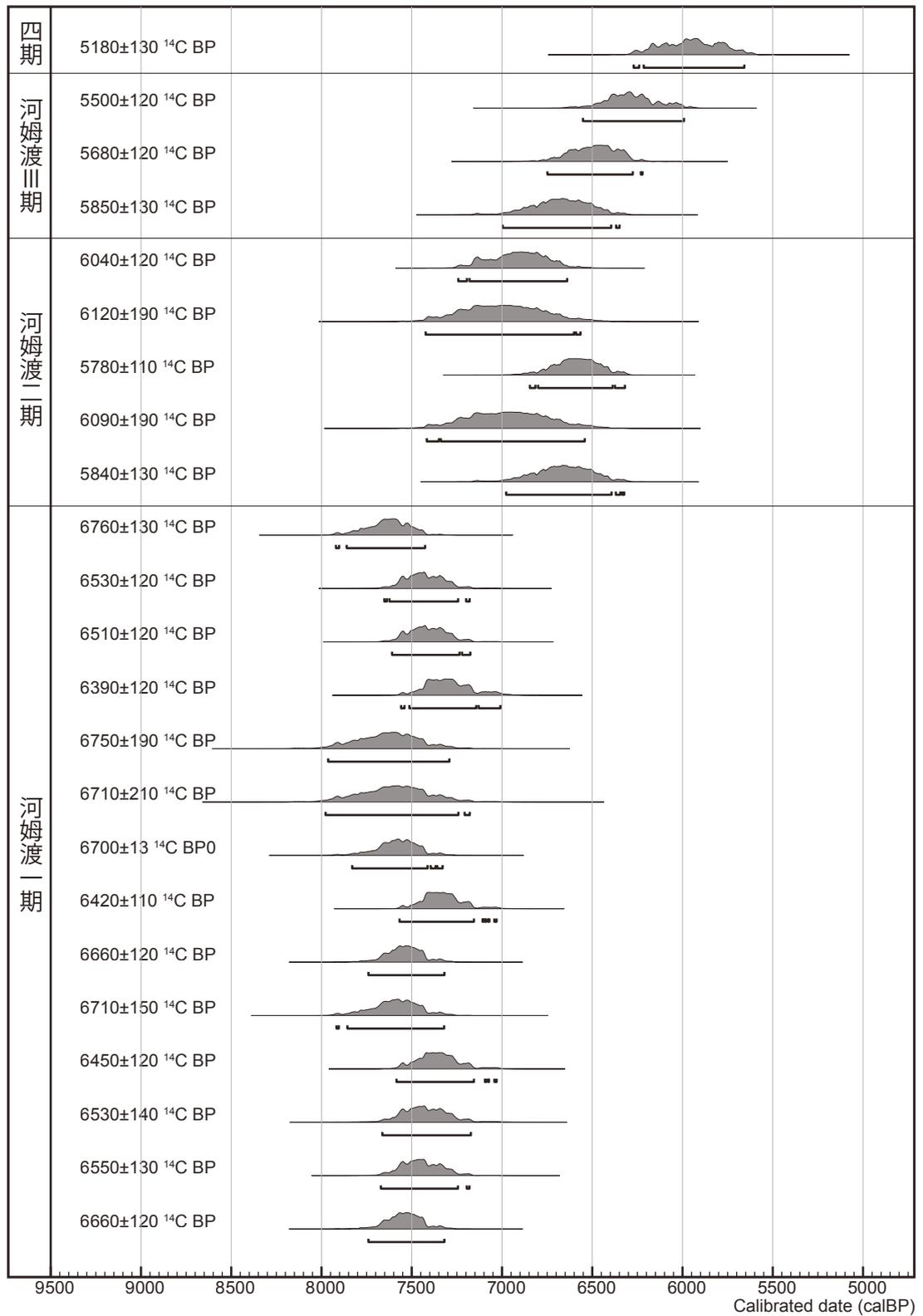


図1 河姆渡遺跡の放射性炭素年代測定結果の暦年較正年代 (IntCal13による)

般に流布している。発掘調査報告書〔南茅部町埋蔵文化財調査団, 2002〕に記載された¹⁴C年代を校正した暦年代であるが、この数値にはいくつかの問題点がある。ここでは発掘調査報告書に記載されたデータについて検討する。

垣ノ島B遺跡では、縄文時代前期に噴出した駒ヶ岳g (Ko-g) 火山灰の下位から縄文時代早期の遺物包含層が検出されており、漆製品もこの遺物包含層中から出土した資料である。縄文時代早期の土器はI群A類(押型文系, 川汲式(日計式)), I群B類(貝殻文系, 物見台式, 住吉町式), I群C類(東釧路Ⅲ式, コッタロ式, 中茶路式, 東釧路Ⅳ式)に区分されており, I群A類は縄文時代早期前葉, I群B類は早期中葉, I群C類は早期後葉の土器群である。このうち, 垣ノ島B遺跡の遺物包含層出土土器の中心となるのはI群B類とI群C類である。

遺物包含層から検出された竪穴住居跡は全て物見台式期のものであり, 土坑群は物見台式期と中茶路式~東釧路Ⅳ式期のものに分かれる。いずれにしろ出土土器型式はある程度限定され, 漆製品が出土したP-97土坑墓も大きくこの2つの土器群のどちらかの時期に帰属するものと思われるが, この土坑からの土器の出土は無く, 漆製品と剥片石器が1点のみである。

垣ノ島B遺跡の発掘調査報告書に掲載された¹⁴C年代測定結果は合計7点であり, このうち漆塗製品が出土したP-97土坑墓において 8010 ± 50 ¹⁴C BPと 8110 ± 40 ¹⁴C BP, 2点の結果が得られている。暦年代がそれぞれ7040 B.C, 7070 B.Cと報告され, 土器付着炭化物の年代測定結果との対比から, 漆製品は物見台式併行期と推定された〔南茅部町埋蔵文化財調査団2002〕。つまり, 漆製品の年代的位置づけは出土土器ではなく, 年代測定結果に基づいている。しかしながら, これらの¹⁴C年代測定結果が得られる前は, 発掘調査担当者がこの漆製品を「縄文時代早期末」と捉えていた可能性が高いことが, 2000年に刊行された『アサヒグラフ』の記事から推測できる〔古澤編, 2000〕。

また, 年代測定結果について注意しなくてはならないのは, 発掘調査報告書に「備考」として書かれた内容である。1点は「ウルシ付き土壌」, もう1点は「土壌」を試料としており, 漆製品そのものの測定結果ではない。阿部千春〔2006〕の記載では両方とも「土壌」となっている点にも注意しておきたい。これらは頭部付近の黒色の染み状の堆積物を試料としたもので, これらは土壌起源の有機物を測定していることになる。したがって, これら2点の年代が垣ノ島B遺跡の漆製品の年代を正確に反映しているとは考えられない。阿部千春〔2006〕は「破壊を伴う調査に消極的だった」ことを記しており, そのため土壌を試料として採取したものと思われる。Ko-g下位からの出土であり確実に日本列島最古段階の漆製品であることが明らかな最重要資料であったため, 当時としてはやむを得ない判断だったのであろう。

垣ノ島B遺跡の漆製品の真の年代は, 資料が失われた現在では新たな¹⁴C年代測定によって検証することができない。そこで, 既存の情報から年代的範囲を絞り込んでみたい(表2, 図2)。

まず, 遺物包含層を被うKo-g火山灰の年代は, 垣ノ島B遺跡の遺跡発掘報告書では 5750 ± 110 ¹⁴C BPという記載がある〔南茅部町埋蔵文化財調査団2002〕。この他, 十勝平野南部の泥炭層におけるKo-g直下と直上のミツガシワ種子で 5770 ± 40 ¹⁴C BPおよび 5760 ± 40 ¹⁴C BPの年代が得られており〔中村・平川, 2004〕, 後者はIntCal 13による暦年較正年代では6670-6470 cal BP, 6660-6450 cal BPであることから, Ko-gの噴出年代はおおよそ6600 cal BP前後を考えておけば良いだ

表2 垣ノ島B遺跡および関連資料の放射性炭素年代測定例

遺跡名	遺構名 or 資料名	分析試料	¹⁴ C年代 (yr BP)	δ ¹³ C	IntCal13による 暦年較正年代 cal BP, 2σ	機関番号	備考
垣ノ島B遺跡	P-97 頭部	ウルシ付き土壌	8010 ± 50	—	9020-8650	—	漆製品出土土壌墓
垣ノ島B遺跡	P-97 頭部	土壌	8110 ± 40	—	9250-8980	—	漆製品出土土壌墓
垣ノ島B遺跡	P-142 遺物No.2	炭化物	8590 ± 60	—	9690-9480	—	物見台式
垣ノ島B遺跡	H-6 遺物No.2	炭化物	8310 ± 60	—	9470-9130	—	物見台式
垣ノ島B遺跡	H-7 遺物No.1	炭化物	8550 ± 80	—	9740-9400	—	物見台式～住吉町式
垣ノ島B遺跡	P-127 遺物No.3	炭化物	6950 ± 50	—	7930-7670	—	I群C類(東釧路Ⅲ式・ コッタロ式・中茶路式・ 東釧路Ⅳ式相当)
垣ノ島B遺跡	P-49 遺物No.2	炭化物	6520 ± 50	—	7560-7320	—	中茶路式
中野A遺跡			8190 ± 130	—	9480-8760	N-2507	物見台式
中野A遺跡			8030 ± 105	—	9250-8590	N-2508	物見台式
中野A遺跡			8250 ± 115	—	9510-8990	N-2509	物見台式
納内6丁目付近遺跡			6340 ± 60	—	7420-7160	KSU-1842	中茶路式
納内6丁目付近遺跡			6370 ± 20	—	7420-7250	KSU-1882	中茶路式
納内6丁目付近遺跡			6390 ± 35	—	7420-7260	KSU-1845	中茶路式
垣ノ島A遺跡	P-181 抗底遺物 No.31210, No.2	炭化材	6410 ± 60	-26.9	7440-7180	Beta-74625	東釧路Ⅳ式
垣ノ島A遺跡	V層 遺物 No.18274, No.3	炭化材	6160 ± 40	-23.6	7170-6940	Beta-74626	東釧路Ⅳ式
垣ノ島A遺跡	V層 遺物 No.18789, No.4	炭化材	6630 ± 40	-22.2	7580-7440	Beta-74627	東釧路Ⅳ式
豊岡6遺跡	H5の地床炉 HF1, 1	炭化物(炭化材と種 実遺体(広葉樹オニ グルミ)が混在)	6640 ± 40	—	7590-7440	Beta-50149	東釧路Ⅳ式
豊岡6遺跡	H5の床直焼土 (覆土14層), 2	炭化物(カエデ属)	6650 ± 40	—	7590-7450	Beta-50150	東釧路Ⅳ式
豊岡6遺跡	石組炉 SF1, 3	炭化物(炭化材と種 実遺体(ヤマグワ, オ ニグルミ)が混在)	6550 ± 40	—	7570-7410	Beta-50151	東釧路Ⅳ式
十勝平野南部 Loc.17	大樹町生花苗沼	ミツガシワ種子	5730 ± 40	-22.6	6640-6410	Beta-32530	駒ヶ岳g直上
十勝平野南部 Loc.17	大樹町生花苗沼	ミツガシワ種子	5720 ± 40	-22.2	6640-6410	Beta-32531	駒ヶ岳g直下

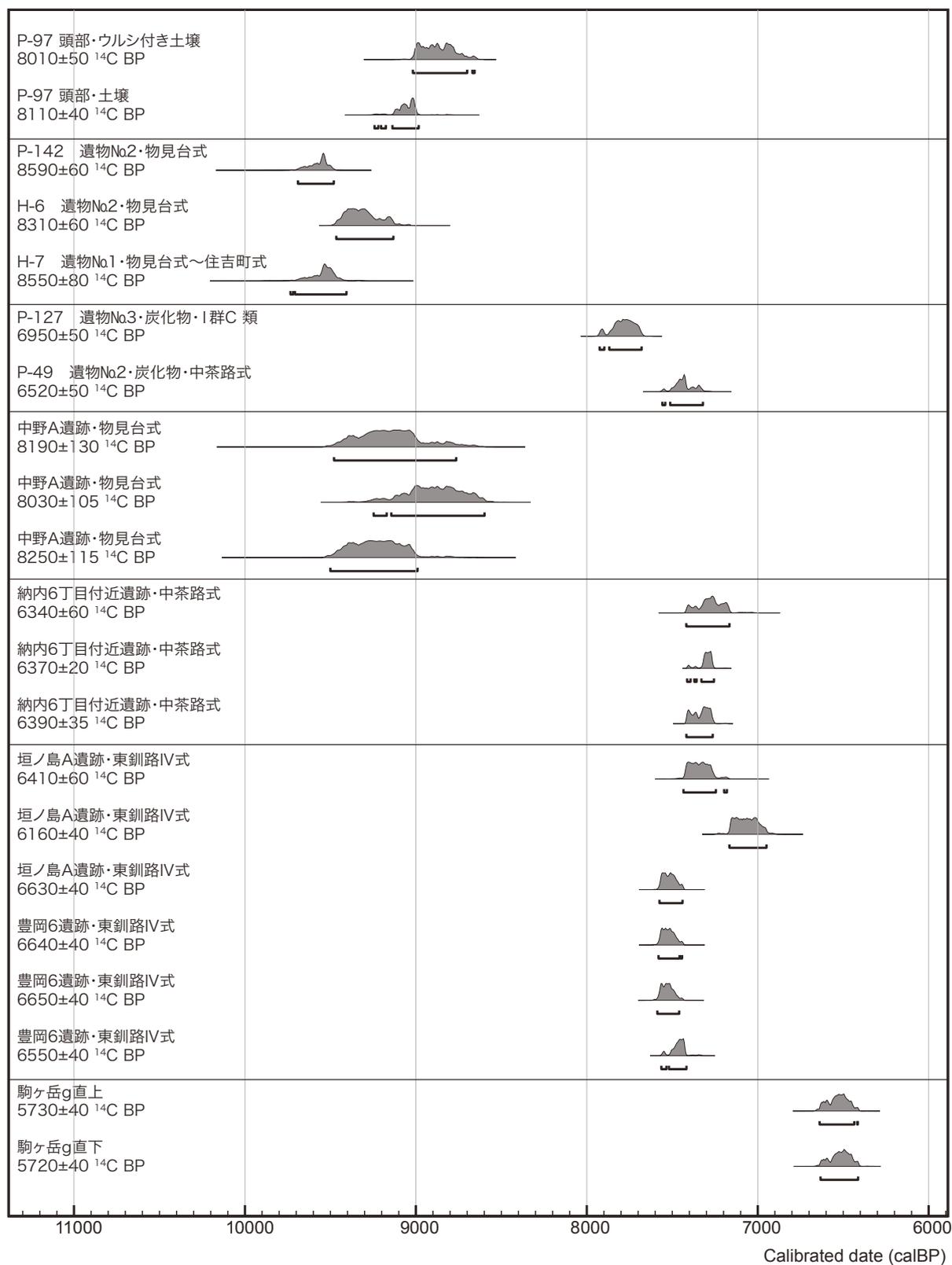


図2 垣ノ島B遺跡および関連資料の暦年較正年代 (IntCal13による)

ろう。これは、縄文時代前期前半の年代である。

次に、垣ノ島 B 遺跡で出土している Ko-g 下位の縄文時代早期土器群であるが、垣ノ島 B 遺跡の報告書では、土坑群は縄文時代早期中葉の物見台式期もしくは、早期後葉の中茶路式～東釧路 IV 式期と推定されている。物見台式については、垣ノ島 B 遺跡で土器付着炭化物が 2 点 (8590 ± 60 ^{14}C BP, 8310 ± 60 ^{14}C BP)、物見台式～住吉町式に相当する土器の付着炭化物について 1 点 (8550 ± 80 ^{14}C BP) の測定結果が得られている。発掘調査報告書では、漆製品を年代測定結果から物見台式期に位置づけているが、これらの ^{14}C 年代は漆製品の年代よりも古い。物見台式の土器付着炭化物の年代が漆製品よりも古いことについて、発掘調査報告書では土器付着炭化物が海洋リザーバー効果の影響を受けている可能性を指摘しているが、炭素・窒素安定同位体比のデータがなく、また付着炭化物の部位（内面か外面か、底部・胴部か口縁部かなど）の情報が無いため、リザーバー効果で説明ができるのかが不明である。北海道の中野 A 遺跡における物見台式併行期の炭化材の年代測定例では、 β 線法によるもので精度が良くないが、 8190 ± 130 ^{14}C BP, 8030 ± 105 ^{14}C BP, 8250 ± 115 ^{14}C BP などがあり、垣ノ島 B 遺跡の漆製品と同等かそれよりもやや古い。

なお、領塚正浩 [2008] による編年では、物見台式期に先行する土器型式は東北北部では白浜式であるが、白浜式については青森県中野平遺跡のクルミ核で 8800 ± 180 ^{14}C BP、青森県田向遺跡の土器付着炭化物で 8530 ± 50 ^{14}C BP の年代測定例がある [小林, 2004]。また、物見台式に後続する住吉町式は、関東の田戸上層式（新）、東北南部の常世 I 式、東北北部の鳥木沢式と併行関係にあるとされるが [領塚, 2008]、これらの ^{14}C 年代はおおよそ $8000 \sim 7900$ ^{14}C BP 前後である。小林謙一 [2017] は、関東の沈線文土器（田戸式）を 8400 cal BP 頃までとみている。物見台式と住吉町式については、住吉町式を古く考える編年案もあり [縄文文化研究会, 1999]、東北北部では吹切沢式に後続する型式に物見台式を位置づけ、住吉町式は吹切沢式に併行する段階に位置づける場合もある。

以上の点から、物見台式期はその位置づけに不明瞭な点があるが、おおよそ $8500 \sim 8000$ ^{14}C BP 前後を見ておけば良いだろうか。その場合、較正年代では $9500 \sim 8900$ cal BP 前後となる。

一方、早期後葉の中茶路式～東釧路 IV 式については年代測定例が少ない。垣ノ島 B 遺跡では中茶路式の土器付着炭化物で 6520 ± 50 ^{14}C BP の年代測定例がある。また、北海道深川市納内 6 丁目付近遺跡で β 線法により中茶路式 3 点 (6340 ± 60 ^{14}C BP, 6370 ± 20 ^{14}C BP, 6390 ± 35 ^{14}C BP) の測定結果が得られている。東釧路 IV 式については、垣ノ島 A 遺跡で東釧路 IV 式期の土坑出土炭化材 1 点 (6410 ± 60 ^{14}C BP) と、土器付着炭化物 2 点 (6160 ± 40 ^{14}C BP, 6630 ± 40 ^{14}C BP) の測定例がある [南茅部町教育委員会, 2004]（ただし、2 点の土器付着炭化物はアルカリ処理がされておらず、年代測定結果の信頼性が不明である）。これらの年代に基づけば、中茶路式～東釧路 IV 式は $7500 \sim 7000$ cal BP 前後となるだろうか。

以上を総合すると、垣ノ島 B 遺跡の漆製品については以下の①～⑤の点が指摘できる。

- ①漆製品の年代は土壌を測定したものであり、信頼性に疑問がある。
- ②漆製品は Ko-g 火山灰の下位の包含層出土であり、 6600 cal BP よりは確実に古い。
- ③土坑群は縄文時代早期中葉の物見台式期と縄文時代早期後葉の中茶路式～東釧路 IV 式期のものがあるが、中心となるのは後者である。

④縄文時代早期後葉の中茶路式～東釧路Ⅳ式期の土坑であった場合、7500～7000 cal BP 頃に位置づけられる可能性が高い。

⑤縄文時代早期中葉の物見台式期であった場合は9500～8900 cal BP 前後に位置づけられる可能性が高い。

垣ノ島B遺跡のP-97土壙墓の帰属時期が、物見台式期か中茶路式～東釧路Ⅳ式期かが判明すれば④か⑤のいずれかの年代を判断できるが、P-97土壙墓には考古学的に時期決定の根拠となる土器片の出土はない。①の理由から、既存のP-97土壙墓の年代で「物見台式」と決めることはできないし、その時期決定には慎重に慎重を期すべきである。

以上の結果を総合的に考えると、垣ノ島B遺跡の漆製品の年代は「6600 cal BPよりは確実に古く、東釧路Ⅳ式の終わり頃の年代と推定される7000 cal BP以前である可能性が高い」としておくのが現状では妥当だろう。垣ノ島B遺跡を証拠として、日本の漆文化が中国の漆文化よりも古いとする議論は、現状では「証拠となるデータが十分に揃っていない」と言わざるを得ないだろう。

④……………ウルシと漆文化の起源について

ここまで、漆文化の起源に関わる研究史を整理し、その起源論に関わる中国河姆渡文化期の漆器の年代および北海道垣ノ島B遺跡の年代的な位置づけについてまとめた。最後に、これらをもとにして、現状での筆者の考えを示し、まとめたい。

1) ウルシの問題

鳥浜貝塚の12600年前のウルシの存在をどのように位置づけたら良いだろうか。これには2つの仮説が考えられ、1つは「自生説」、もう一つは「持ち込み説」である。

岡村道雄[2010]は、鳥浜貝塚のウルシ材の証拠などから、旧石器時代にはウルシがごく少数ながら自然分布していた可能性を指摘した。しかし、日本列島でのウルシの自然分布については植物学者は否定的である。能城修一は鳥浜貝塚の12600年前のウルシも、やはり人が「管理」したものだと考えている[能城, 2017]。現在の日本列島の環境下では天然林内にウルシが存在していないことや、ウルシは人為が加わらない限り、最終的には他の植物に負けて枯れていってしまうからであり、それゆえ日本列島ではウルシが栽培植物、外来植物とみなされている。現在、日本列島に生育する個体はすべて植栽されたものである[山崎, 1989; 米倉, 2016]。日本列島各地のウルシのDNAの均質性も、比較的近い過去に行われた「植栽」という行為によって生じた現象である可能性も否定できない。

今後、もし鳥浜貝塚よりも時期的に遡る後期旧石器時代、あるいはそれ以前の最終氷期の自然堆積物中からウルシ化石の証拠を見つければこの自生説を検証することができるが、現在のところそのような資料は見つかっていない。なお、本州・九州と大陸との間に最後に陸橋があったのは43万年前(MIS 12)とも推定されている[樽野, 2010]。ウルシが43万年前以前に日本列島にまで分布を拡げており、その後現在の後氷期の温暖・湿潤環境でウルシが日本列島で自生できな

いのであれば、同じくらい温暖・湿潤な環境であった約12万年前の最終氷期(MIS 5)を生き延びることができたのか、といった疑問も生じる。以上の点から、最終氷期以前にウルシが日本列島に自生していたという仮説については、筆者は現時点で否定的に捉えている。

では、ウルシは12600年前以前に日本列島へと誰かが持ち込んだものが定着し、その頃にすでに栽培されていたものなのだろうか。ウルシの本来の天然分布は中国にあり、持ち込みだと考える場合には「その地域から、あるいはその地域を経由した人の動き」を想定しなくてはならない。約12600年前以前に大陸からの人々の流入があったとすれば、約37000年前にホモ・サピエンスが日本列島に到達した頃、そして約20000年前頃からの細石刃文化の広がりに伴う大陸からの人々の流入という、大きくは2回の人類の移動の波が考えられる(約28000年前頃には、朝鮮半島と九州との間で小規模な人の移動があった可能性もある)。もしこれらの時期に人の移動に伴ってウルシが日本列島に持ち込まれたのだとするならば、塗料としての漆文化が見当たらないことから、接着剤・接着材の用途として持ち込まれた可能性が挙げられるだろうか。

ここで注目すべきことは、ウルシに限らず、中央アジア原産のアサヤアフリカ原産のヒョウタンなども日本列島では縄文時代草創期から早期初頭には日本列島内の遺跡から出土している点である。ホモ・サピエンスの東アジアへの拡散の過程で、様々な有用植物が人々と一緒に移動した可能性、そしてこれらは後期旧石器時代の出来事であった可能性は十分に考えられる[工藤, 2018]。筆者は、これを「有用植物パッケージ仮説」と呼んだ。

筆者は日本列島での「ウルシ自生説」よりも、後期旧石器時代にすでにウルシが日本列島に持ち込まれた可能性のほうが高いのではないかと考えている。しかしながら、縄文時代草創期や後期旧石器時代の低湿地遺跡がほとんど見つかっていないことから、現在のところ具体的なウルシ・漆文化の証拠は皆無であり、後期旧石器時代におけるウルシの「持ち込み説」も想像の域を超えない。また、アサヤヒョウタンは1年生草本植物であるが、木本植物であり樹液が採取できるまでに少なくとも数年が必要なウルシを、アサヤヒョウタンと同様に旧石器時代人とともに移動したと考えて良いのかどうか問題となる。移動性の高い旧石器時代の狩猟採集民が、ウルシという樹木とともにその分布を広げていくことが可能かどうかは現時点では解明する手立てが全くなく、これらを議論することは困難である。今後、縄文時代草創期や旧石器時代にまで遡るウルシや漆の何らかの証拠が見つければ、この仮説を議論・検証することもできるだろう。さらなる研究を着実に蓄積し、最終氷期のウルシ化石を探索する必要がある。

2) 漆文化の起源の問題

縄文時代早期末から前期にかけて、日本列島の本州から北海道にかけて漆器を出土する遺跡が増えてくる。直接的な年代測定例が得られている例を表3に示した。また、それらのIntCal13による較正年代を、図3に示した。日本列島における漆製品は石川県三引遺跡を最古として、7000年前以降、出土事例は多くなる。また、夫手遺跡の漆液容器の存在や漆器が出土する集落遺跡周辺でのウルシ材の出土例からみて、日本列島でウルシの木から樹液が採取され、漆器が製作されていたことは疑いようもない。代表的な資料の実年代を示すと、三引遺跡の櫛が約7200年前[工藤・四柳, 2015]、最古の漆工用具である夫手遺跡の漆液容器が6800年前頃[松江市教育委員会, 2000]、貝殻

表3 縄文時代早期末～縄文時代前期の主要な漆製品の年代測定例

都道府県	遺跡	種類	備考	時期	¹⁴ C年代 (BP)	Intcal13 較正年代 (cal BP, 2σ)	文献
石川県	三引遺跡	結菌式櫛		早期末～ 前期初頭	Beta-391664	6290 ± 30	7270-7160 工藤・四柳 2015
島根県	夫手遺跡	漆液容器		前期前半	Beta-130024	5910 ± 30	6800-6660 松江市教育委員会 2000
新潟県	大武遺跡	漆糸		前期前半	Beta-138261	5760 ± 40	6660-6450 新潟県埋蔵文化財 調査事業団 2014
神奈川県	羽根尾 貝塚	結菌式櫛		前期前半	Beta-374007	5615 ± 30	6460-6310 工藤・永嶋 2020
富山県	南太閤山I 遺跡	漆塗り ヒョウタン		前期前半	Beta-201253	5330 ± 40	6270-5990 西本編 2009
福井県	鳥浜貝塚	刻菌式櫛		前期後半	Beta-394454	5310 ± 30	6190-5990 工藤・四柳 2015
北海道	西島松3 遺跡	漆塗繊維 製品 No.3	漆皮膜+土壌	前期後半	Beta-405227	4845 ± 40	5660-5470 工藤・永嶋 2020
青森県	向田 (18)	木胎漆器	2000年出土	前期末		4790 ± 50	5610-5320 野辺地町立歴史 民俗資料館 2004
青森県	向田 (18)	把手付木胎 漆器	2001年出土 No.1	前期末		4670 ± 50	5580-5300 野辺地町立歴史 民俗資料館 2004
青森県	向田 (18)	把手付木胎 漆器	2001年出土 No.2	前期末		4880 ± 40	5720-5480 野辺地町立歴史 民俗資料館 2004
青森県	向田 (18)	把手付木胎 漆器	2001年出土 No.2	前期末		4620 ± 40	5470-5080 野辺地町立歴史 民俗資料館 2004
青森県	向田 (18)	把手付木胎 漆器	2001年出土 No.2	前期末		4600 ± 40	5470-5060 野辺地町立歴史 民俗資料館 2004
青森県	向田 (18)	把手付木胎 漆器	2002年出土 No.1-1	前期後半		4790 ± 50	5610-5320 野辺地町立歴史 民俗資料館 2004

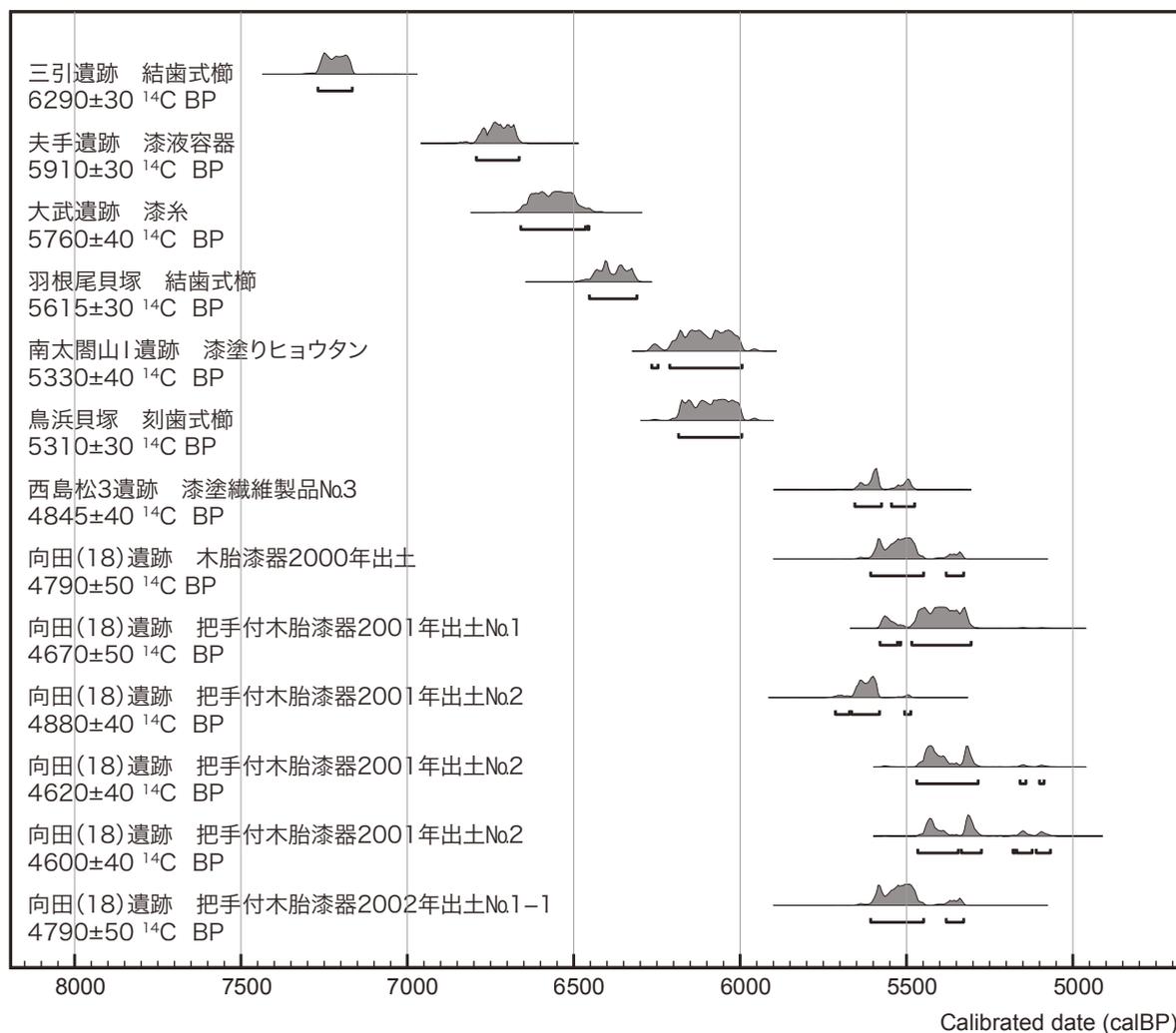
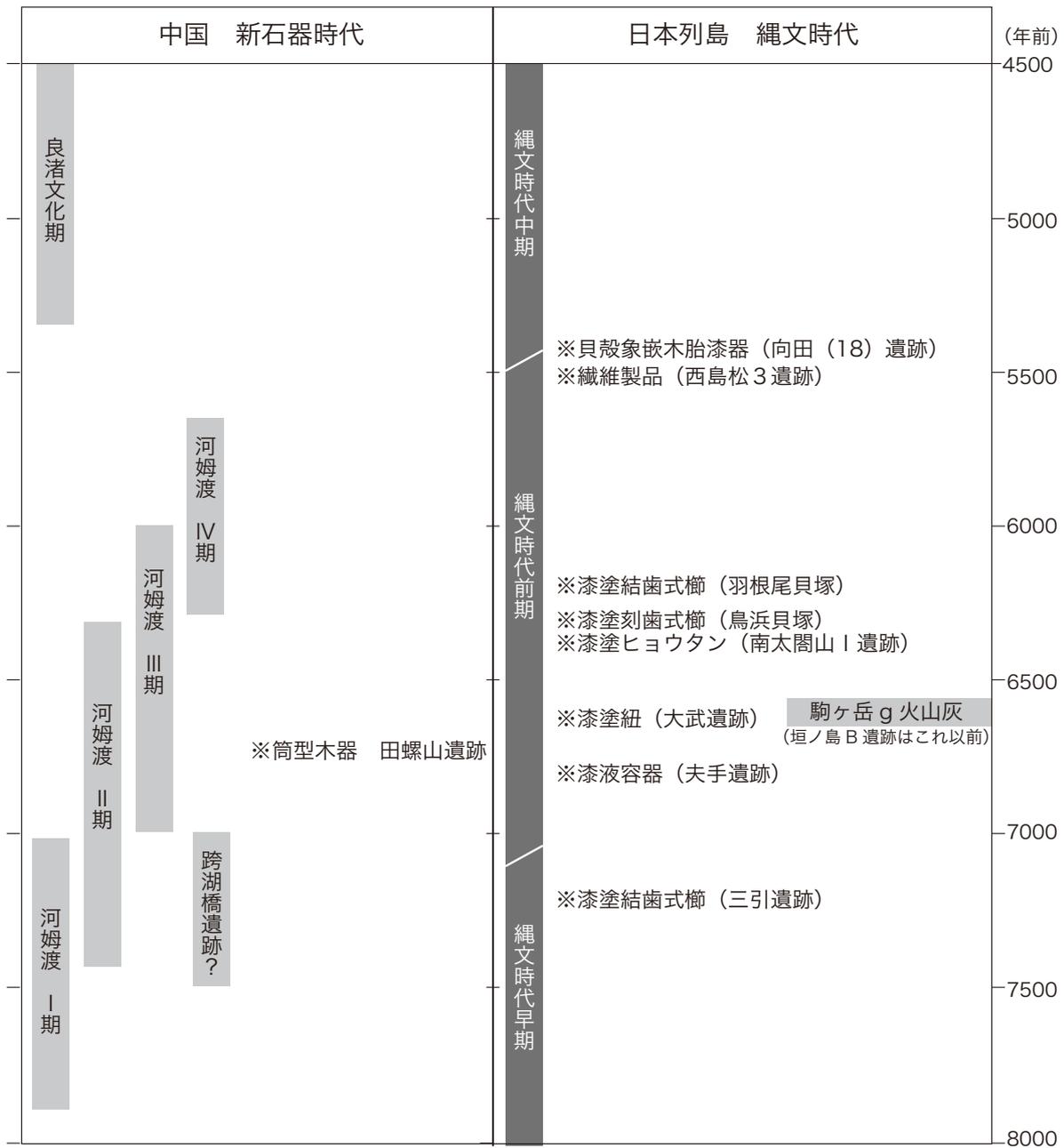


図3 縄文時代早期末～前期の主要な漆製品の暦年較正年代 (IntCal13による)

象嵌木胎漆器の向田(18)遺跡が5500年前頃〔野辺地町立歴史民俗資料館, 2004〕となる。

四柳嘉章〔2006〕は日本海側に初源期の漆器出土遺跡が多く分布することからこれを「漆街道」と呼んだが、このうち、最南端は島根県夫手遺跡であり、最北端(最東端)は、北海道標津町の伊茶仁チシネ遺跡である(伊茶仁チシネ遺跡の漆製品は出土状態が脆弱で堆積物ごと保存処理が行われており放射性炭素年代測定ができないため、その正確な数値年代は不明である)。対馬海流に乗って漆文化を持った人々が日本海沿いに急速に広がったかのようであるが、早期末から前期末までは実際には1700年間もある(図4)。各地の集落で漆器を生産するためには、その場所にウルシを植栽し、管理することが必要であり、漆文化の分布の広がりには実際にはかなりの時間がかかっていたのかもしれない。この問題を解明するためには、各地の出土漆器の放射性炭素年代測定による厳密な年代決定が必要不可欠なのである。

筆者は以前、ウルシと漆文化の起源に関する研究の現状について、これまでの仮説を大きく4つ



(※漆製品そのものの年代測定が実施された資料)

図4 中国と日本列島との漆文化の年代的比較

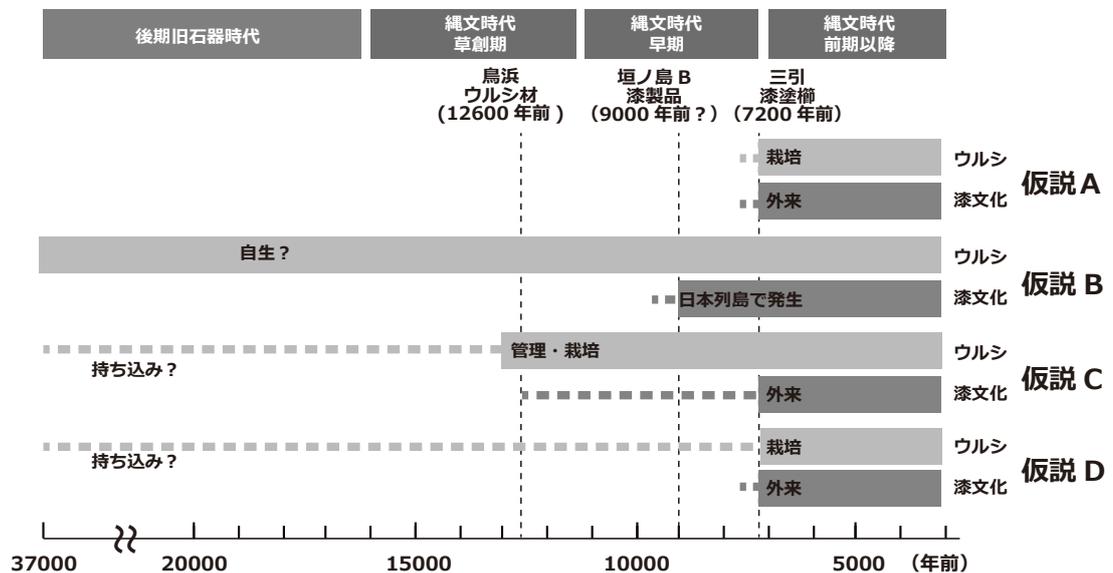


図5 ウルシと漆文化の起源をめぐる仮説 (工藤, 2017)

に分けて整理した (図5) [工藤, 2017]。

仮説 A は、植物としてのウルシと漆文化は外部から持ち込まれたもので、縄文時代早期末～前期初頭にかけて広がったとみる考え方である。しかしながら、鳥浜貝塚の 12600 年前のウルシ材の発見がこれを否定した。少なくともウルシは早期末～前期初頭以前から日本列島には存在している。

仮説 B は、ウルシは日本列島に古くからごく少数ながら自生しており、また垣ノ島 B 遺跡の年代を採用して漆文化は北海道起源と考えるもので、岡村道雄が代表的な論者である。仮説 B を採用するためには、垣ノ島 B 遺跡の年代の信頼性の検証および、9000 年前頃まで遡る他の漆製品の出土例を見つけることが必要であろう。

仮説 C は、ウルシは 12600 年前の鳥浜貝塚以前に日本列島に持ち込まれ、何らかの形で人が「管理」していたが、漆文化の初源自体はそれよりも遅れると考えるものである。その初源については、9000 年前から 7200 年前の間で確定していない。主に能城修一らの考え方に近いものだろう。

仮説 D は、植物としてのウルシは後期旧石器時代以降に日本列島に持ち込まれ、植物としてのウルシは存在していたが、漆文化の始まりは 7200 年前の縄文時代早期末から前期初頭を大きくは遡らない、また、漆文化は列島外からの持ち込み、とする考え方である。漆文化も「持ち込み」と考える理由は、縄文時代早期末から前期にかけて広がった漆文化が、技術的にも美術工芸的にも当初から完成された水準にあるためである。また、河姆渡文化期の漆製品の年代と、日本列島の縄文時代早期～前期の漆製品の年代とを対比すると、河姆渡遺跡の第一期の漆器は、三引遺跡と同程度かそれよりもやや古い可能性が高い。垣ノ島 B 遺跡の資料を除外した場合、河姆渡文化の古い段階の漆文化は、日本列島の漆文化に先行している。筆者はこの仮説 D の立場を基本的に採っているが、これには縄文時代早期末から前期初頭にかけての大陸からの人の移動を証明しなくてはならない。また、河姆渡文化の中心地である長江下流域は、ウルシの本来の分布域からは外れる点も注意しておきたい。より内陸部もしくは中国東北部などのウルシの本来の自生地周辺で、河姆渡文化に先行

する漆文化が存在していた可能性は考えられないだろうか。具体的な証拠はいまだ発見されていないが、鈴木公雄〔1988〕の「共通起源説」は魅力的な仮説である。今日的な視点でこの問題をさらに検討していくことが必要であろう。そのためには、今後、中国および日本列島の初源期の漆製品に関するさらなる年代学的な基礎研究が必要不可欠である。

〔補注〕

なお、本稿脱稿後（2020年12月）、富山県上久津呂中屋遺跡出土の縄文時代早期後葉の漆塗櫛（櫛1902）で6630 ± 30 BPの年代が得られていることを、富山県文化振興財団の町田賢一氏からご教示いただいた（富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2013『上久津呂中屋遺跡発掘調査報告 第三分冊 自然科学分析・総括編』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）。

IntCal13による較正年代では7580～7440 cal BP、最新のIntCal20でも7580～7430 cal BPとなる。現時点では、上久津呂中屋遺跡の漆塗櫛が縄文時代最古の漆製品となり、その起源は約7500年前まで遡る可能性が高くなった。

引用文献

- 鯨本真友美 2016 「縄文時代の低湿地遺跡—鳥浜貝塚が教えてくれること—」『さらにわかった！縄文人の植物利用』, 30-49, 新泉社
- 阿部千春 2006 「北海道垣ノ島B遺跡」『季刊考古学』95:33-36
- 阿部芳郎 2004 『失われた史前学 公爵大山柏と日本考古学』岩波書店
- 阿部芳郎 2012 「縄文時代の資源利用と漆工芸の展開」『アルケオメトリア 考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』219-229, 東京大学総合研究博物館
- 安 志敏 1985 「長江下流域先史文化の日本列島への影響」『考古学雑誌』70-3:297-315.
- 伊藤由美子 2006 「ウルシ属果実化石の同定」『近野遺跡IX』322-331, 青森県教育委員会
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助 1976 『続・照葉樹林文化』中央公論社
- 江坂輝弥 1952 「二. 土器」『加茂遺蹟—千葉縣加茂獨木舟出土遺蹟の研究』33-50, 三田史學會
- 江坂輝弥 1973 「農耕文化の起源を求めて」『古代史発掘2 縄文土器と貝塚』152-155, 講談社
- 江坂輝弥 1977 「縄文の栽培植物と利用植物」『ドルメン』13:15-31
- 岡村道雄 2007 「縄文の漆と漆文化のルーツを求めて」『是川遺跡ジャパンロード [漆の道] 報告書2004-2006』35-39, 是川遺跡ジャパンロード調査実行委員会事務局
- 岡村道雄 (2010) 『ものが語る歴史20 縄文の漆』同成社
- 木内武男 1962 「漆器」『日本考古学辞典』232-233, 東京堂出版
- 木内武男 1971 「木工と漆工」『新版考古学講座 第9巻特論<中>』182-193, 雄山閣
- 喜田貞吉 1929 「青森県是川村石器時代遺跡の一大発見」『東北文化研究』1-5:97-101.
- 喜田貞吉 1934 「奥羽地方石器時代実年代の下限—宋銭発掘の確実なる亀ヶ岡式土器遺蹟調査報告—」『歴史地理』63-1
- 喜田貞吉・杉山寿栄男 1932 『日本石器時代植物遺物図録』刀工書院
- 工藤雄一郎 2017 「縄文時代の漆文化—最近の二つの研究動向—」日高薫・工藤雄一郎編『URUSHI ふしぎ物語—人と漆の12000年史』, 240-247, 国立歴史民俗博物館
- 工藤雄一郎 2018 「動植物・資源」日本考古学協会編『日本考古学・最前線』, 239-253, 雄山閣
- 工藤雄一郎・網谷克彦・吉川純子・佐々木由香・鯨本真友美・能城修一 2016a 「福井県鳥浜貝塚から出土した大型植物遺体の¹⁴C年代測定—縄文時代草創期から前期までの堆積物相序および土器型式の年代の再検討—」『植生史研究』24:43-57
- 工藤雄一郎・鈴木三男・能城修一・鯨本真友美・網谷克彦 2016b 「福井県鳥浜貝塚から出土した縄文時代草創期のクリ材の年代」『植生史研究』24:59-68.
- 工藤雄一郎・四柳嘉章 2015 「石川県三引遺跡および福井県鳥浜貝塚出土の縄文時代漆塗櫛の年代」『植生史研究』

- 23-2:55-58.
- 工藤雄一郎・永嶋正春 2021 「縄文時代・続縄文時代の遺跡出土漆製品の¹⁴C年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』（本特集号掲載予定）
- 甲野 勇 1928 『史前學會小報 第2號 埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告』工芸美術研究会
- 小杉 康 2003 「森林適応の工芸技術」『縄文のマツリと暮らし 先史日本を復元する—3』18-37, 岩波書店
- 小林謙一 2004 「八戸市田向遺跡出土土器付着物の14C年代測定」『田向遺跡I』八戸市埋蔵文化財調査報告書第105集, 303-308, 八戸市教育委員会
- 小林行雄 1938 「弥生式文化」『原始文化』日本文化史大系1, 214-253, 誠文堂新光社
- 小林行雄 1947 『日本古代文化の諸問題—考古学者の対話—』高桐書院
- 小林行雄 1951 『日本考古概説』創元社
- 小林行雄 1962 『古代の技術』塙書房
- 佐々木高明 1982 『照葉樹林文化への道—ブータン・雲南から日本へ—』日本放送出版協会
- 清水潤三 1963 「漆塗飾—千葉県横芝町谷台出土—」『考古学雑誌』48-3:672-73
- 清水潤三 1972 「是川遺跡と縄文文化」『是川遺跡出土遺物報告書』5-13, 八戸市教育委員会
- 縄文文化研究会 1999 「縄文土器全国編年表（東日本）」『縄文時代』10号
- 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊.
- 杉山寿栄男 1928 『日本原始工芸概説』（1971年復刻版, 北海道出版企画センター）
- 鈴木公雄 1984 「寿能泥炭層遺跡の調査の意義—特に木製品・漆製品を中心に—」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—（分析調査・考察・総括）』845-852
- 鈴木公雄 1988 「漆を使いこなした縄文人」『古代史復元2 縄文人の生活と文化』17-32, 講談社.
- 鈴木三男 2007 「東アジアのウルシの植物学」『是川遺跡ジャパンロード [漆の道] 報告書2004-2006』116-131, 是川遺跡ジャパンロード調査実行委員会事務局
- 鈴木三男・能城修一・小林和貴・工藤雄一郎・鯨本真友美・網谷克彦 2012 「鳥浜貝塚から出土したウルシ材の年代」『植生史研究』21-2, 67-71
- 鈴木三男・能城修一・田中孝尚・小劉健全・鄭雲飛 2014 「縄文時代のウルシとその起源」『国立歴史民俗博物館研究報告』187:49-71
- 浙江省文物考古研究所 2003 『河姆渡：新石器时代遗址考古发掘报告』文物出版社
- 浙江省文物考古研究所・萧山博物館 200-4『跨湖桥』文物出版社
- 樽野博幸 2010 「哺乳類化石から見た日本列島と大陸間の陸橋の形成時期」『第四紀研究』49:309-314.
- 鳥浜貝塚研究グループ, 編 1979 『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—』, 福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館.
- 中尾佐助 1966 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店
- 中尾佐助 1967 「農業起原論」『自然—生態学的研究—』, 329-494, 中央公論社
- 永嶋正春 2002 「垣ノ島B遺跡土壙墓（P-97）出土漆様装飾品の赤色顔料について」『垣ノ島B遺跡』, 103-105, 南茅部町教育委員会
- 中村慎一編 2010 「放射性炭素年代測定報告（3）」『浙江省田螺山遺跡の学際的総合研究 科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書, 平成18年度～平成21年度研究成果報告書』, 金沢大学人文学類フィールド文化化学研究室
- 中村有吾・平川一臣 2004 「北海道駒ヶ岳起源の広域テフラ, 駒ヶ岳gテフラの分布と噴出年代」『第四紀研究』43:189-200.
- 奈良文化財研究所・北海道教育委員会・南茅部町教育委員会 2004 『垣ノ島B遺跡出土漆製品の分析』
- 新潟県埋蔵文化財調査事業団編 2014 『大武遺跡II（古代～縄文時代編）』新潟県教育委員会
- 西田正規 1977 「鳥浜貝塚 栽培種子」『ドルメン』13:85-89
- 西本豊弘編 2009 『弥生農耕の起源と東アジア—炭素14年代測定による高精度編年体系の構築—平成16～20年文部科学省・科学研究費学術創成研究費 研究成果報告書』国立歴史民俗博物館
- 西本豊弘・鈴木三男・孫国平・中村慎一 2010 「放射性炭素年代測定報告（3）」『浙江省田螺山遺跡の学際的総合研究 科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書, 平成18年度～平成21年度研究成果報告書』267p, 金沢大学人文学類フィールド文化化学研究室
- 野辺地町立歴史民俗資料館 2004 『向田（18）遺跡』野辺地町教育委員会

- 能城修一 2017 「鳥浜貝塚からみえてきた縄文時代前半期の植物利用」『さらにわかった！縄文人の植物利用』50-69, 新泉社
- 能城修一・佐々木由香 2014 「遺跡出土植物遺体からみた縄文時代の森林資源利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』187:15-48.
- Noshiro, S. and Suzuki, M. 2004. *Rhus verniciflua* Stokes grew in Japan since the early Jomon period. *Japanese Journal of Historical Botany* 12 : 3-11.
- Noshiro, S., Suzuki, M. and Sasaki, Y. 2007. Importance of *Rhus verniciflua* Stokes (lacquer tree) in prehistoric periods in Japan, deduced from identification of its fossil woods. *Vegetation History and Archaeobotany* 16 : 405-411.
- 南茅部町埋蔵文化財調査団 2002 『垣ノ島 B 遺跡』南茅部町教育委員会
- 南茅部町埋蔵文化財調査団 2004 『垣ノ島 A 遺跡』南茅部町教育委員会
- 古澤陽子編 2000 『アサヒグラフ別冊 古代史発掘総まくり 2000』朝日新聞社
- 保坂三郎 1972 「縄文文化に対する問題」『是川遺跡出土遺物報告書』101-110, 八戸市教育委員会
- 松江市教育委員会 2000 『夫手遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会
- 三田史學會(編) 1952 『加茂遺蹟—千葉縣加茂獨木舟出土遺蹟の研究』三田史學會
- 森川昌和 1995 「赤と黒の文化」『「いろ」の研究—縄文時代前期の漆について—』中京女子大学アジア文化研究所
- 森川昌和 2002 「漆の来た道」『中京女子大学アジア文化研究所論集』2:69-81.
- 森本六爾 1933 「日本における農業起源」『ドルメン』1-8:1-4
- 吉川純子・伊藤由美子 2004 「青森市岩渡小谷(4)遺跡より産出した大型植物化石群」『岩渡小谷(4)遺跡Ⅱ』, 293-319. 青森県教育委員会.
- 吉川純子・伊藤由美子 2006 「縄文時代東北地方北部のウルシ利用の調査」『三内丸山遺跡年報』70-73, 青森県教育委員会.
- 吉川純子 2014 「果実でウルシが見分けられるか」『ここまでわかった！縄文人の植物利用』159・161, 新泉社
- 吉川昌伸 2006 「ウルシ花粉の同定と青森県における縄文時代前期頃の産状」『植生史研究』14:15-27
- 吉川昌伸・吉川純子・能城修一・工藤雄一郎・佐々木由香・鈴木三男・網谷克彦・鯉本真友美 2016 「福井県鳥浜貝塚の縄文時代草創期から前期の植生史と植物利用」『植生史研究』24:69-82
- 四柳嘉章 2006 『漆Ⅰ』ものと人間の文化史 131-I, 法政大学出版局
- 四柳嘉章 2009 『漆の文化史』岩波書店
- 米倉浩司 2016 「ウルシ科」『改訂新版 日本の野生植物 3』, 281-284, 平凡社, 東京.
- 六角紫水 1932 『東洋漆工史』雄山閣
- 安田喜憲 1977 「照葉樹林の形成と縄文文化」『ドルメン』13:51-61
- 山形県教育委員会 1990 『押出遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会
- 山崎 敬 1989 「ウルシ科」『日本の野生植物 木本Ⅱ』(佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編), 4-6. 平凡社
- 山内清男 1932a 「日本遠古之文化 2 縄紋土器の起源」『ドルメン』1-5:85-90.
- 山内清男 1932b 「日本遠古之文化 3 縄紋土器の終末」『ドルメン』1-6:46-50
- 山内清男 1932c 「日本遠古之文化 3 縄紋土器の終末」『ドルメン』1-7:48-53
- 山内清男 1932d 「日本遠古之文化 5 4 縄紋式以後(前)」『ドルメン』1-8:60-63
- 領塚正浩 2008 「貝殻・沈線文系土器」『総覧縄文土器』94-103, アム・プロモーション
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatt, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., & van der Plicht, J. 2013. IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4):1869-1887

(学習院女子大学国際文化交流学部)

(2019年5月28日受付, 2019年10月7日審査終了)

Questions Concerning Lacquer Culture in the Jomon Period and its Origin : From Historical Perspectives to Contemporary Challenges

KUDO Yuichiro

This paper discusses the history of research conducted from 1926 to the 2010s concerning the origin of the lacquer culture in the Jomon period. In the 1930s, when the chronological position of the Jomon period was undecided, there was a theory that the lacquer culture in the Tohoku region at the end of the Jomon period, which is represented by the Korekawa Site, was established under the influence of the Hiraizumi Culture. The existence of a lacquer culture in the Yayoi period confirmed at the Karako Site in the 1940s led to the view that it was brought from the Yayoi period under the influence of the Chinese Han Culture. Beginning in the 1960s, as the theory of East Asia broadleaved evergreen forest culture was advocated, and there was a widespread view that the lacquer culture in the Jomon period was brought from Mainland China along with various cultivated plants. In the 1980s, the common origin theory, which hypothesized a common origin of the Chinese Neolithic culture and Jomon culture, also appeared. Diffusion theories argued that the lacquer culture in the Jomon period was brought from outside the Japanese archipelago. In contrast, in consideration of the excavation at the Kamo Site of lacquerware made during the early Jomon period, the “indigenous” theory of lacquer culture in the Jomon period also appeared in the 1960s. Then, in the 1990s, researchers who focused on the uniqueness of Jomon culture and the maturity of the lacquer culture in the Jomon period began to advocate the “indigenous” theory. The discovery of the Kakinoshima B Site in 2000 and the confirmation of the existence of the oldest lacquer tree remain at the Torihama shell mound in 2007 strengthened the theory of indigenous lacquer culture in the Jomon period. However, the reliability of the dating of the Kakinoshima B Site is not guaranteed. Moreover, excluding the case of the Kakinoshima B Site, this paper argues that it is essential to chronologically verify that the lacquerware products of the Hemudu Culture in China are as old or older than the lacquerware products made at the end of the Jomon period in Japan and reconsider the possibility that the origin of the lacquer culture in the Jomon period may have been brought from Mainland China.

Key words: Jomon period, origin of the lacquer culture, lacquer tree (*Toxicodendron vernicifluum*) , Radiocarbon dating, Hemudu Culture
